

雲井昭善著

「佛教興起時代の思想研究」

前田 恵 学

佛教が興起した時代を考察し、佛陀その人が出現した思想史的背景を明らかにしようとする試みは、近代における学問的関心によって、はじめて登場するをえた、研究課題の一つと言いうる。その研究の根柢には、佛陀もまた時代の子であり、歴史的社会的制約の下に生まれ、また生きることができたとする問題意識が働いている。佛陀を教主至尊として絶対視し、歴史や時代を超越した崇拜の対象としてしか考えなかった過去の時代においては、かかる研究は起りえなかった。佛陀を歴史的に見るところ、必然的にまたその時代背景を考察することとなる。

この種研究は、他の学問の分野におけると同様、西洋の近代の学者に負うところが多い。例えば、佛教以前のヴェーダ時代の社会生活や文化に関しては、つとに Heinrich Zimmer が *Alt-indisches Leben* (Berlin 1879) を著わし、佛教興起の時代に關つては Richard Fick の *Die Soziale Gliederung im Nordöstlichen Indien zu Buddhas Zeit* (Kiel 1897: English ed. by Sh. Mitra, Calcutta 1903) や T. W. Rhys Davids:

Buddhist India (London 1903) が出て、今日では古典的な位置を占めるほどになっている。佛教興起時代の思想的背景を形成する政治・社会・経済・民族・文化・宗教といった諸方面の研究は、多くの学者の注目をひき、研究成果も少なしとしない。最近わが国の学者も強い関心を示し、いくつかのすぐれた成果もあげられてきている。

佛陀時代の諸思想に対して、わが国の学界に大きな興味を惹き起したのは、宇井伯寿博士の「六師外道の研究」(『印度哲学研究』第二所収)ではなかったかと思われる。羽溪了諦博士の研究『宗教研究』新第五卷第二号、同第六卷第一号、および「現代佛教の研究」(臨時特輯号)や増谷文雄博士の『佛陀時代』も、言わば先駆的な役目を果たした研究であった。その後、インド古代の宗教や歴史を扱った多くの諸研究が、直接間接にこの問題に言及している。

雲井昭善博士は、多年にわたって佛教の興起とその時代の思想の研究を手がけ、すでにその成果の一端を、多くの論文によって発表された。近著『佛教興起時代の思想研究』は、博士積年の研究を五百頁に近い大冊として公刊された力作である。本書の内容は、本論第六章から成り、それにへはしがき・序言・問題の提起》が先行し、最後に総論と英文目次ならびに梗概を附し、ついに各種の索引を添えて、学的用意の完全を期している。

本論第一章は「佛教興起時代」と題し、先ず佛教興起の時代設定を取りあげて、佛教が一つの宗団として形をととのえた、

西暦前六世紀から前二世紀ころまでにこれを限定した(第一節)。次にこの時代の歴史的意義を論じ、これを、(一) 都市国家の成立と、クシャトリヤ階級や資産家商人の抬頭によって示される社会の変動と、(二) 精神的な側面においては、バラモンに對抗する自由思想家や佛教の興起に見られる人間の自覚に注目した(第二節)。

第二章「佛教興起以前のインド」においては、佛教以前バラモンの世界には、ブラーフマナに示される祭祀中心の宗教があり、次のウパニシャッドは、祭式の絶対的な力を否定して、真実なるものを探求し、人間を解放しようとしたが、これがやがて自由思想の発現をうながす思想的背景となったという(第一節)。

次に佛教興起時代に、六師外道や六十二見の如き自由思想が起った理由は、一つにはバラモンの祭式万能主義ないしは現実の肉体(物質)を軽んじて、目に見えぬ来世や精神を偏重する思想に対する反動である。いま一つには経済的・社会機構の発展と物質的繁栄にともなう必然的な結果であるとする(第二節)。

「佛教興起時代の諸思想」と題する第三章は、六師外道、特に順世派と邪命派と、それに異端説としての現在涅槃論を扱ったものである。全六章中、最も精彩に富んだ一章をなす。およそ初期佛教資料の研究には、つねに精細刻明な討究が要求される。ひと通りのテキストの読解によって、創見を出すことは不可能に近い。しかし精密な研究がなされれば、問題は無限に出てくる。これは評者の抱く印象であるが、本章の研究もまたこの考えを立証するもののように思われる。著者は先ず六師外道につ

いて、(一) 多くは感覚論的唯物論者であったこと、(二) 業因果を信ぜず、伝統的バラモンの祭祀・供儀を否定した点におよその共通点が見られるとして、六師の代表的な説を図式的に概観している。六師の説が非常に理解し易くなって便利である(第一節)。さらに進んで、順世派(Lokayata)についての諸資料を、細心の注意をもって、その性格を識別し、アジタに見られる如き唯物論的系統とサンジャヤに見られる如き詭弁論的系統の二つの伝承を区別している。後世の Sarvadarśanasaṅgraha に Carvāka の名をもって呼ばれる順世派の当体は、前者の系統の思想をその内容とする。しかし初期以来、大乘にいたるまでの佛教資料の順世派とは、主として後者をその内容とする。佛教の資料において、前者を順世派の内容とする解釈を示すのは、後代大乘の論釈においてであることを、はじめて明らかにしている(第二節)。

次に邪命派について、第一に Ājīvika を邪命派と訳するのは、従来の学者の説(宇井説、中村説)の如く、必ずしも佛教者からする貶称ではないと批判する。しかし Ājīvika が、自ら邪命と称するわけではないので、この点の論証は、やや歯切れが悪いように思われる。とにかく、邪命派は裸形で苦行し、不作法を敢えてしたし、マッカリ・ゴースーラの思想を見ても、その教義自身に直接の原因があると論ずる。第二に、ゴータマ・ブッダは他の学説・思想に対して寛容であったのに比し、邪命派に対しては厳しい批判をもって答えた。その理由は、ゴースーラの努力無用論や業思想の否定にあった。第三に、邪命派は

宗団として舎衛城や王舎城で活動し、佛教のサンガとはしばしば相対立する関係にあったと推定している（第三節）。博士が、佛教の教団と対立関係にあった宗団の姿をえがき出された労は多とするに足る。

さらに六十二見の現在涅槃論とブッダの現法涅槃とを比較して、その相違が明確にされたことは大きな収穫である。前者は五欲を満足せしめる快樂主義か、しからざれば、四禪によって一時的に恍惚忘我の境に到達するものにすぎない。後者は、般若の智慧によって、無明や煩惱を滅尽し、苦を止滅することその内容とするのである（第四節）。

第四章においては、「佛教興起の社会的基盤」を論ずる。先ず、クシャトリヤ階級が進出し、バラモン階級が後退した。商工業者が進出し、経済力のある者が社会の実権をにぎる。都市国家が成立し、ビンビサーラの如き国王や、アナータピンディカの如き資産家（長者や居士）が佛教に帰依して、外護者となり、佛教はその経済的基礎を確立した。佛教の二大根拠地たる舎衛城と王舎城に関して、バラモンや邪命派など外教との抗争・軋轢が、舎衛城中心に生じたという指摘は、注目するに足る。これはブッダ入滅後、舎衛城の佛教教団が急速に衰微した有力な原因の説明を提供することになる。

第五章は「宗教とその本質——バラモン宗教と佛教の論点——」と題し、祭祀を中心とするバラモンの宗教の在り方と、これに対する佛教の批判的立場を明らかにしている。先ず第一節は、バラモンの宗教において、祭祀がいかに重要な意味をも

つかを論じ、祭祀において牛や山羊・羊・鶏・豚といった動物が殺され、奴隸や召使いが酷使されることに對して、佛教から激しい非難がなされたという。ブッダは、祭祀を行なうよりも慈悲の精神を強調し、修養のできた人間を重んじたのである。

第二節では、古代インドにおける、ヴェーダからブラーフマナを経てウパニシャッドにいたる来世意識の推移を述べる。死の恐怖が古代人の心をゆすぶったブラーフマナにおいては、来世の意識が明確になり、祭祀の神秘力によって、来世の在り方を左右できるとした。ウパニシャッドにおいては、ブラーフマナの祭式中心主義から知識重視の傾向に転じ、梵我一如によって、畏怖なき不死の世界に達せんとした。佛教興起時代の自由思想家は、来世の問題よりも現実の物質世界に古代人の意識をひきもどし、バラモンの祭式が無意義であるとした。ブッダもまた形而上学的な来世の存在の有無には無記の立場をとった。しかし倫理実践的な意味で、施論・戒論・生天の論や因果応報の理においては、やはり来世の存在を前提とする側に立った（この点については第六章の参照が望まれる）。

第三節においては、初期佛教資料に見られる三種の外道の見解（宿命論・無因論・有神論）をとりあげて、それが具体的にいずれの唱えた説であるかを比定する。しかるのち、縁起の立場からする佛教の批判を掲げている。第四節は、バラモン優位の四姓観をとりあげ、これに対する佛教の四姓平等観の背後には智慧と慈悲の宗教としての根本的立場があることを指摘している。

第六章は「原始佛教の倫理性」を取り扱かう。六師外道や佛教以前の思想と対比してはいるが、本章はまさしく佛教そのものの研究である。ここでは佛教の人間観(第一節)、世間観(第二節)、および輪廻や不死涅槃の問題(第四節)を取りあげて、前五章において論じた外道の思想に言及しつつ、佛教の根本的立場を明らかにしようとしている。そして本章は、佛教の本質そのものを内面から把握する、本書につづく第二作への序曲をなすものであることを、予告している。

これを要するに本書は、佛教興起という時代をとらえ、時代のもつ歴史的社会的な特質を考慮しつつ、その時代の背後にある思想について、広く深い考察を加えている。各章の体裁は、繁簡必ずしも一様に見えないが、それは資料の制約のしからしむるところであろう。各章の配列は、必ずしも体系的な整合を印象づけないにもかかわらず、全体として一貫した関心をもつて終始し、内面的にはすべて連関して、一つの問題追求の思索の跡を示している。本書は、佛教の大局的な立場から言えば、一面において佛教異義史の研究とか、異端思想の研究とも言うべき性格をもつ。異端思想の研究は、正統思想を明らかにするところに窮まる。著者が本書によって、ブッダの教えが、当時の一般社会にいかにか受けとられたか、「当時の諸思想と連関して、側面から浮彫にしようとした」意図は、美事に達せられている。本書はまた、佛教興起時代の自由思想に最も力を注ぎ、六師外道を中心とする研究であるとも言いうる。かかる観点か

ら見れば、これほど大がかりに徹底してこの問題を究明した研究は他に類がなく、学界に大きな寄与をなしたものと言いうる。その論旨は明快で、叙述は平明であり、時には精密に資料を分析し、時には巧みに資料を利用して、もって読者に理解し易からしめている。その所説は、時に創見を示して鋭い洞察を行なっているが、しかも全体としては、きわめて穩健妥当なものである。これも著者の用意周到にして綿密な研究の結果であろう。ただ敢えて評者が気付いた点に言及するならば、

内容的な問題として、二一〇頁に見られる南路(Dakṣiṇāpatha)と北路(Uttarāpatha)の解釈はその一つであろう。そこには舍衛城を起点として、一方で南方アラカ的首都 Patitihana への通商路が南路であり、他方王舍城にいたる通商路が北路であるとする。南路・北路は、道路の名称よりはむしろ地方名と考えられることが多いので、かかる解釈には論証を要すると思われる。次に原始佛教の縁起説について、「これあるが故にかれあり、これなきときかれなし。これ生ずるよりかれ生じ、これ滅するよりかれ滅す」の定型句をあげ、これを相依相待の理を示すとの解釈を採用している(二九九頁)。本書の縁起の理解はこれによって通ざれている如くであるが、この解釈は今日考え直す必要が生まれている。右の定型句は「原因(例えば無明)あるが故に結果(例えば苦)があり、原因がなくなれば結果もまたなくなる」という、因果の一方的な依存関係を述べたものである。決して「これ」と「あれ」との相依相待の関係を表わしてはいない。この定型句を相依相存の関係として

解釈したのは、宇井博士であろう。後世大乘の、中論あたりの縁起の解釈を、原始佛教の縁起にあてはめて理解したものである。この解釈はきわめて大きな影響を与えたが、今日から見れば、解釈のしすぎであったと思われる。現在においても、師説を重んずる一部の学者の中には、依然として相依相存の縁起の解釈による向もあるが、文献の忠実な解釈とは言えないと思われる。

本書は全体として引用正確であり、ミスプリントも少ないが、アジタの仮名書きはアジタ・ケーサカンバリとあり、原語は *Ajita Kesakambalin* とされている。ケーサカンバリという仮名書きは、宇井博士の「六師外道研究」に、原語を *Kesakambali* と考えられたところから生じたもの。今日ではケーサカンバリでよい。二八〇頁の『増支部』第三集六十二経は六十一経である（この経の解釈については、*Manorathapuranī* II, p. 2745 参照）。他に単純なミスプリントとして、二六頁の *symple* は *simple*、一〇〇頁の *Tattvasaṅgraha* は *Tattvasaṅgraha* がよく、一三五頁の *Dhammapadāṭṭhakathā* は *Dhammapadāṭṭhakathā* であり、*kaḍāci* は *kaḍāci*、*ajivako* は *ajivako* である。一五五頁のパーバ (*Pāb*) はパーヴァー (*Pāvā*)、一五七頁の *chajābhijātyo* は *chajābhijātyo* であり、二一六頁の首途は首都である、といった多少のミスプリントが見られるが、これはかえって本書にミスがいかに少な

いかに示すことにはなっても、本書の価値をいさかも減ずることにはならないであろう。

最後に佛教興起時代の思想を考えるにあたり、考慮すべき問題として、直接に佛教を受け入れ、これを支持した一般民衆の思想がある。バラモンや六師外道の思想の如きは、当時のプロフェッショナルなインテリ思想である。一般民衆の思想はまた別にあつて、佛教の思想的背景をなしていたに相違ない。業や輪廻といった生活と密着した思想は、そうした民衆の中に生じた姿において把えることが望まれる。かかる思想は、必ずしも体系的なドグマという形をもたないであろうが、現実に民衆を動かす力があつたと思われる。原始佛教資料に説く施論・戒論・生天の論も、民衆がそれを受け入れたのは、その内容的裏づけをかれら自身もつていたからであろう。その内容を明らかにすることは、一般民衆の思想を明らかにすることになるとと思われる。ブッダはそのような民衆の思想を土台として、かれの教えを説いたのである。この問題は、ジャータカなどを資料とすれば、多少は手がかりがつかめるようである。しかしこれは独立の大きな仕事であるから、本書の取り扱かう当面の課題ではなかったのであろう。ただ『佛教の伝説』の一書もある著者のことであるから、ないものねだりの望蜀の言としてお許し願いたい。

(一九六七年三月二十五日 平楽寺書店 三五〇円)